

のクワの大木の枝、また、スキー場の林道わきのクワの大木の枝がかじむれ、白くなっていた。

山のクワの木は必ずといっていい位、皮が食べられていた。カイコの幼虫はクワの葉を食べて成虫になる。人間の子供はクワの実をよく食べる。サルはクワの皮を食べる。クワは動物にとって、共通の好物のような気がする。

先日、黒部川右岸の道路、宇奈月、音沢線を宇奈月の方から少し歩いた。その落石防御用の洞門の屋上にサルのふんが沢山あった。人間のふんより小さいが、同じ形をしたものである。その中は繊維性のものだけだった。その上の斜面にある、クワの枝がやはりかじられて、白くなっていた。急しゅんな黒部川右岸にもサルがいるのである。

3. サルの適応性

サル(哺乳類・霊長目・サル科)は熱帯性の動物というが、サルは生活のきびしい豪雪地帯の宇奈月にも生息することができる。旺盛な適応性を持っている。

その原因の一つは、

- 群れを作り、子供を守り、また、互いに助け合うこと。例えば、雪上を移動する時は一列に並び、子ザルの前後を大きいサルが守るといったこと。
- 見張り係、誘導係と役割分担をする社会生活の知恵を持っていること。
- 雑食性でたいがいのものは食べること。
- 人間以外の天敵が少ないこと。

4. 人間とサルの共存のために

ニホンザルは元来はブナやミズナラの天然林が分布中心地であるという。しかし、山の田畑では、村人たちは秋には作物を守るために次のことを行なっている。

- ガスボンベをつかって、定時的に銃声を響かせ、音でサルをおどしている。
- サルの毛皮を畑に立てて、悪いことへの「みせしめ」としている。
- 山小屋に犬をかって、犬のなき声でいやがらせている。

これらのことも余り功を奏さないときは、転作しかしようがないのである。サルの食べないネギなどの作物を植えるのである。でも、サルの嫌いな作物は極、限られている。

サルとの共存の手立ては、自然は人間だけのものではなく、生きとし生けるすべての動物と共有するものであるという考え方から出発するより他にないと思う。その上で、人間は餌づけ、住み分け等の弱者「サル」の保護対策を考えるべきである。それが昔からサルを利用して来た人間の償いであると共に、今後の豊かな自然界の維持につながる。

米山周辺の野外研修会

「新潟県東頸城郡の郷土資料館及び米山などを訪れて」

(平成元年7月29日～30日)

若林 一成

1. 高速北陸自動車道 境P.A

8時30分、本多会長初め、6名がそろそろ。今回の研修旅行の計画をたてる。境P.Aには松尾芭蕉の句碑「一つの家に遊女も寝たり萩と月」や、「まが玉の里」にふさわしく当地特産のヒスイで作られた「まが玉」のモニューマン、そして、ヤマハギ、ハマナス、黒松、ヤブツバキ等、当地周辺に自生している樹木がふんだんに植えられて、きれいな庭園をなしている地元の特長と個性があつて、好感がもてる。

2. 名立谷浜 P.A

午前9時54分に、ここにも立ち寄る。また、ここにも芭蕉の句碑「文月や六月も常の夜に似たり」が、直立するドイツトウヒに囲まれ、夏のあつさを一層、あつくしている。

3. 柏崎駅、10時37分、ここで参加するもう1名を待ち、落ち合う。

4. 午前11時26分、7名が自家用車3台に分乗し、国道235号線を走る。国道といっても富山県の国道と比べると県道のような狭くて、おそまつな山道であり、時たま、農作業帰りの自転車に出会う。でも、感心したことは沿道に「青空市場」、「無人市場」が目についたことである。そこに、山里ならではの、のどかさや野生味と新鮮さを感じた。

5. 松代、郷土資料館

松代町11時51分、松代郷土資料館は、国道から、なお、山道の奥に入った、標高250mの山中にあった。民家をそのまま、その場で町営の資料館にしたものである。

木造3階建てのトタンぶきで、その軒下には家屋を囲むように池がある。敷地が狭いが、高い建て物である。軒下の池から富山県の五箇山の家屋を思い出した。トタン屋根から自然に落ちる雪を融かすためであろうか、池に水がいっぱいあつた。

浦山小学校 自宅 〒938 宇奈月町栃屋

近くで出土した400万年前の二枚貝「シロウリガイ」(現在、相模湾の500m~700mの深海にいる二枚貝)がびっしり入った大きな化石が庭先に置いてあった。

館内の一階では民具が目につく。折りたたんで、持ち運びの便利な「木枕」、メノ-の石に木の柄のついた鉄片をぶつくとよく火花の出る「火打道具」、今のバケツにあたると言う「うるし塗りの竹かご」(火事かご)などが陳列されていた。

当地に生息する動物の剥製

○イカル ○ビンズイ ○ほんどきつね ○ノジコ 等があった。

二階には、この館のそばに生えているサワグルミ(カワクルミ)で作られた大きな火ばちを真中に置いた立派な客室があった。

また、当地の信仰を集めていると思われる松茸神社に関する資料が一つの部屋いっぱいにあった。その中に、越後の上杉謙信が小田原(北条氏康)攻めの途上、奉納したという「日の丸」の紋章のついた軍配と短剣の写真があった。上杉謙信の影響を思う。古代、我が越中へも運ばれたと思われる「黒燐石剥片」の山積みを見て、我が郷土とのつながりを連想する。

山里の産業である「伊沢紙」や綿糸、養蚕等に利用された用具も沢山、陳列されていた。

3階には農器具がいっぱいあった。

天然記念物として、当地には長命寺の大銀杏、十二神社の大樺、寺田の大楓、犬伏松茸山の五葉松があることに北陸の樹木の共通性を思う。

春の彼岸に立方体の雪像の上に常緑樹の枝「ツバキ?」をさして、先祖を供養する「雪墓作り」に、この地独特のおくゆかしさと土着の文化を思う。

帰りに、にぎやかに彩色された800円の当地特産のヒヨウタンを1個、土産に買う。

6. 上信越高原 国定公園「清津峡」

松之山温泉による。午後1時55分、そこで、最後の1名も参加し、総勢8名が顔をそろえる。そこから、清津峡へ行く。

清津峡の登山道が落石のため、通行止めとなり、峡谷に入れなかった。硬い黒い玄武岩と黒い版状の堆積岩を川原で見つけた。短歌や俳句の玄武岩の句碑が温泉街のはずれの一角に十数基、林立していた。当地の人々の文学を愛する心の豊かさを思った。「山国を 水が出でゆく 花のあと」はその中の割りにわかりやすい句碑の一つである。山を愛し、水を愛し、花をめぐる心のゆかしさを思う。

7. 松之山郷 「民俗資料館」

午後5時、ここにも立ちよる。庭にヤマユリが大きな花をあでやかに咲かせていた。入口にうるしの木とうるしの実(ろうの原料)があり、うるしとりや、「ろう」の製法についての説明があった。また、コウゾから和紙を作る製法が順序よく書かれ、その道具が陳列されていた。これらが「昔、副業として栄えたもの」のコーナーの一部である。

枕には、「はこまくら」のほかに「木まくら」があることを知った。「木まくら」は全く、直方体の木の箱である。その枕の中に小物が入られるようになっていた。

石をくりぬいただけの「かまど」があり、つけ木の製法とつけ木もあった。つけ木の材料は主に「くるみの木」「ほうの木」のようである。

8. 国指定天然記念物 松茸社の「大樺」

この大けやきを見学した。樹令約1900年、目通り13.3m、樹勢なお、旺盛で広い新潟県下最大の巨木である。基部が空洞化し、大きな枝を持ちこたえるために、何本もの太いワイヤで補強されていた。戦前は、この大樺を村人は「まきのき」といい、決して「けやき」といわなかったという。「まきのき」の由来は、征夷大將軍・坂上田村麿呂が遠征の折に、この樺に馬をつないだという言い伝えがあったため、この木を敬い「馬置きの木」から「まきのき」と言ったようである。

9. 「松之山温泉」(東頸城郡松之山町)

「千歳館」に宿泊した。夕食の団らんでは、「ツツガムシ病」にかかった体験、「ダニ」のとり方、海外派遣教員の体験からの西欧の人達のものの考え方等が、それぞれ話題になり、ここでも有意義な懇談のひと時を持つことができた。

お風呂の湯は塩分があり、体あたたまる。湯かげんも丁度なお湯であった。なお、この塩分を含むお湯をつかって、昔、「塩」をとったと聞き、びっくりした。海を持つ上杉謙信が海を持たない山中の武田信玄に好敵手の友情として「塩を送った」という古事に改めて、考える余地を見出したからである。

10. 「米山登山」(柏崎市)

7月30日(日)、いよいよ米山登山に向かう。米山山頂は割に低く、標高992.6mで、しかも、標高700m位まで林道があり、車で行けるということで、楽な気持ちで出かけた。よく道を探し、道に迷い、大平部落の登山口まで行ったが、車の通行止めになっていた。そこで、希望者だけ、旧登山道をのぼった。全く、階段状の山道である。

◎ブナ林……ブナ林は宇奈月町では標高 500 m～600 m 位からでないで見られないのに、ここでは標高 300 m 位の所で、すでに見ることができた。

◎オオイワカガミの群生……おどろいたことは登山道の路傍にびっしり巨大な葉をした「オオイワカガミ」が沢山あることである。宇奈月町では「イワウチワ」と「イワカガミ」とよく混生した所があるのだがここではなかった。

◎ヤマユリ……宇奈月町では、山に香りをよくはなつ「ササユリ」があるのに、ここでは、ササユリはなく、代わりに大柄な「ヤマユリ」によく出会った。

◎クルマユリ……標高 400 m から雑木林の中にクルマユリがかれんな赤い花をつけていた。

標高 650 m が平らになり、見晴らしもよく、ベンチも作ってあって、休憩所になっていた。そのまわりには、山ユリ、クルマユリは勿論、ユキツバキが緑色の実をつけ、タムシバも、こぶし状の緑色の実をつけていた。枝が「はかりの目」のような模様のあるアズキナンもあり、子供の頃、よく高い木にのぼって食べた赤く、あますばい実を思い出し、懐かしく思われた。

彼方の山頂に米山薬師と避難小屋の建て物が遠望された。もう、時間的にも午後 4 時をまわり、富山へ帰宅するにはもう遅く、山頂をきわめることを又の機会にあずけて、いさぎよく下山した。



廃村の民家を利用した民俗資料館

平成 2 年 4 月 21 日

富山県生物学会役員名簿

- 会 長 本 多 啓 七
 名誉会員 植 木 忠 夫
 小 林 貞 作
 坂 下 栄 作
 副 会 長 武 田 宏 (新川地区)
 高 桑 昇 (富山地区)
 鎌 仲 郁之助 (高岡・氷見地区)
 中 川 清 憲 (砺波地区)
 長 井 真 隆 (大学関係)
 増 田 恭次郎 (大学関係)
 理 事 33 名 ○印-常任
 明 地 孝 導 蘭 生 弘 美 ○石 浦 邦 夫 ○永 崎 晋
 ○大 島 哲 夫 大 田 保 文 大 野 忠 広 加 藤 好 治
 川 添 憲 三 菊 井 良 ○九 沢 清 久 坂 下 律 子
 ○佐 藤 卓 ○島 田 郁 雄 志 垣 修 介 ○須 河 隆 夫
 ○小 路 登 一 ○高 山 正 一 郎 砂 田 龍 次 ○田 中 晋
 ○武 田 宏 ○殿 山 美 喜 夫 ○田 中 忠 次 鳴 橋 直 弘
 ○中 川 定 一 布 村 昇 南 部 久 男 南 山 隆 博
 ○本 多 省 三 ○本 瀬 晴 雄 三 吉 利 之 若 林 一 成
 ○安 井 一 朗
 監 事 永 崎 晋 田 中 忠 次
 幹 事 長 本 多 省 三 (事務局長)
 幹 事 大 田 保 文 太 田 道 人 布 村 昇 南 部 久 男
 若 林 一 成 本 瀬 晴 雄